

# 清沢満之と真宗大学



清沢満之書状より

2008年 4月1日(火) - 4月26日(土)  
大谷大学博物館

近代化された大谷大学は、1901（明治34）年10月13日開校の真宗大学にはじまります。その初代学監（学長）に就いた清沢満之は「開校の辞」に、真宗大学の特質を「宗教学校」、ことに「浄土真宗の學場」として「自信教人信の誠を尽くす人物を養成する」ことであると明示しました。他の大学が近代的な諸学のみを求めるなかで、真宗大学は宗教を重視し、「真宗」を明らかにする人間教育の場として、独自のあり方を築きました。

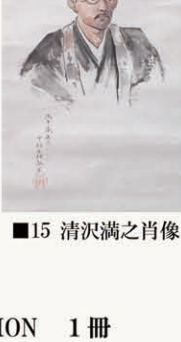
その前年、清沢は東京に出て真宗を学ぶ若き学徒数名と共に私塾「浩々洞」を開き、雑誌『精神界』を発行して、真に尊貴なる人間の自立的共存の道を採り、創造的な人間の文化を築こうとしました。この考えに連動して真宗大学が東京に開校されたのです。

## 出品目録

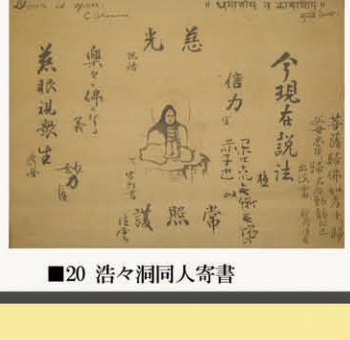
- 1 真宗大学新築の位置に就いて（『教界時言』第9号）**  
紙本活版 冊子 縦 22.0×横 14.7 1897年（明治30）  
真宗大学の所在地について論じた清沢満之の論文。この中で清沢は真宗大学の京都・東京の両京設置と東京先行を主張した。東本願寺の寺務改正と教学刷新を訴える今川覚神、月見覚了、稲葉昌丸、清川円誠、井上豊忠、清沢満之は、1896（明治29）年、京都白川村に教界時言社を設立し、その機関誌として『教界時言』を発刊した。
- 2 真宗大学敷地購入校舎建築二関スル書類 1冊**  
算紙墨書 冊子 縦 27.8×横 18.6 1897～1900年（明治32～33）  
真宗大学東京移転の際の敷地購入・校舎建築に関する書類。1900（明治33）年1月、太田祐慶、松岡秀雄、清沢満之ら7人が建築掛に任命され、その用地は東京府北豊島郡栗鴨村大字栗鴨字宮仲に求められた。展示は工事請負の入札結果を建築掛が記した箇所。
- 3 栗鴨村真宗大学ノ図 1枚**  
紙本墨書 縦紙 縦 63.7×横 55.6 明治時代  
真宗大学構内の平面図。敷地の総面積は6,830坪、建築総面積は831坪余り。教場・寄宿舎・閲覧室・書庫・食堂など16の建物からなる。総工費は57,000円で、大倉土木組（現大成建設）が工事を請け負った。1900（明治33）年7月に着工、翌年9月に落成した。
- 4 真宗大学附近五千分之一略図・真宗大学構内略図 1幅**  
紙本活版 軸装 縦 47.8×横 34.2 1901年（明治34）  
真宗大学の周辺図および構内の略図。開校当時の栗鴨村は、のどかな田園風景が広がっていた。近隣に栗鴨監獄や東京真宗中学敷地などが記される。本品は『無尽灯』第6巻第10号の付録として付されたもの。
- 5 真宗各学設立申請書控 1冊**  
算紙墨書 冊子 縦 25.8×横 18.7 1899～1900年（明治32～33）  
東本願寺が企画した真宗大学、真宗京都中学、真宗東京中学などの設立申請書控。1899（明治32）年8月4日、全国の私立学校を地方長官の監督下に置くことを目的とした私立学校令が公布された。同年10月、真宗大学は私立学校の許可願いを京都府知事内海忠勝に申請、同年11月7日に認可された。
- 6 等位認定申請書類（『真宗大学条例』のうち） 1冊**  
算紙墨書 冊子 縦 27.0×横 19.0 1900年（明治33）  
1900（明治33）真宗大学の徴兵猶予に關わる申請書類。1900（明治33）年2月、文部大臣樺山資紀に等位認定を申請し、同月に認定された。等位認定とは、徴兵令第13条で、徴兵猶予された官立府県立中学校と同等以上と認めることである。
- 7 真宗大学東京移転記念写真 1枚**  
モノクロ写真 縦 35.7×横 43.5 1901年（明治34）  
真宗大学の東京移転につき、知恩院山門前で撮影された記念写真。1901（明治34）年6月27日、真宗大学の東京移転につき、京都を去る暇乞いとして、東山の太谷祖廟に参拝した。「大谷の松吹く風の音は永く忘る、こが出来るぬ」という歌が雑誌『精神界』に残されている。
- 8 真宗大学広蓋 1面**  
本地漆塗 縦 26.7×横 26.7 明治時代  
真宗大学で使用されていた式盆。背面に金文字で「真宗大学」と記す。1901（明治34）年10月13日、東京真宗大学は開校式を挙げた。式典会場は、図書館閲覧室で、まず正面の仏壇が開かれ、一同起立に就いて「君が代」が演奏され、南条文雄による「教育物語」誦読の後、初代学監（学長）清沢満之が「開校の辞」を述べた。
- 9 「知進守退碑」拓本 1幅**  
紙本墨拓 軸装 縦 185.0×横 72.4 1901年（明治34）：原碑  
東京開校を記念して建立された石碑の拓本。東本願寺第23代宗主彰如（句仏）の筆による。「知進守退」は、曇鸞の『浄土論註』に由来している。裏面に第2代学長南条文雄による真宗大学の沿革が刻まれる。この碑は、構内移転にともない移設され、今も本学構内に建つ。
- 10 毎学年各学科担任表 1冊**  
算紙墨書 冊子 縦 26.5×横 19.3 1901～11年（明治34～44）  
真宗大学の学科担任表。本科（宗門の須要に応ずる学科を教授する）、予科（本科に入るための予備の課程）、各学年の学科担任者が記され、開校にあわせて教授陣の充実が図られたことがわかる。
- 11 日誌 4冊（7冊のうち）**  
算紙墨書 冊子 縦 23.6×横 16.3 1898～1907年（明治31～40）  
真宗大学で記された日誌。展示は、1903（明治36）年6月6日の初代学監（学長）清沢満之の逝去についての記事である。葬儀に際して、真宗大学では、臨時休業し、哀悼の意を表すために午前10時の出棺時刻にあわせて講堂で追悼会が勤められた。
- 12 所化学籍簿 2冊**  
算紙墨書 冊子 縦 27.5×横 19.5 1899～1907年（明治32～40）  
真宗大学入学者の学籍簿。所化とは学生のこと。東京開校当時は予科97名、本科61名、研究院17名の合計175名が在籍していた。
- 13 所化心得并寄宿舎規定 1枚**  
紙本活版 縦紙 縦 27.3×横 20.2 明治時代  
真宗大学の学生の心得と学生寮の規則。学生の心得の第一には、「宗義を信奉し智慧をし、布教伝道の基を建つべきこと」と記される。学生は構内に建てられた寄宿舎で共同生活を送り、特別な理由により通学を許可された者も舎監の監督を受けた。
- 14 掛時計 1点**  
掛時計 縦 150.0×横 65.5 明治時代  
真宗大学時代に使用されていたと思われる掛時計。精巧舎（現セイコー）製。1901（明治34）年8月、東京株式取引所仲買人の玉塚次郎より寄贈の旨が記される。
- 15 清沢満之の肖像 1幅**  
紙本石版 軸装 縦 103.0×横 82.6 1909年（明治42）  
清沢満之の肖像画。原画は中村不折が描き、第23代宗主彰如（句仏）が「南瓜にも仏性あらばこの通り」というユーモラスな贊を記す。1909（明治42）年の清沢七回忌に石版刷にて制作配布されたもの。中村不折は明治から昭和初期にかけて活躍した洋画家。
- 16 宗教哲学骸骨 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 18.8×横 13.0 1892年（明治25）  
清沢満之の著した宗教哲学の概説書。清沢の最初の著書。真宗大学家における講義の要旨で、稲葉昌丸の序が付される。書名の「骸骨」には、すべてのせい肉を落して、生涯の思想を貫く、清沢の基本姿勢があらわれている。
- 17 THE SKELETON OF PHILOSOPHY OF RELIGION 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 19.0×横 12.5 1893（明治26）  
『宗教哲学骸骨』の英訳本。野口善四郎訳。1893（明治26）年アメリカ・シカゴで開催された「コロンビア世界大博覧会」では「万国宗教大会」が行われ、野口は「世界の宗教」という発表の中でこの書を紹介した。
- 18 清沢満之の書状 1通**  
紙本墨書 縦紙 縦 16.3×横 89.8 1895年（明治28）  
1895（明治28）年正月7日、稲葉昌丸宛に宛てた書状。東本願寺に対し財務整理と教学振興を献策していた清沢らは、沢柳政太郎を大谷尋常中学校の校長に迎え、学制改革に着手したが、本山との対立により沢柳は解職された。本品はこの頃の清沢の心境を知る好個の資料であり、本格的な教学刷新運動への決意が見受けられる。
- 19 私は此の如く如来を信ず（我信念） 1幅**  
算紙インク書 軸装 縦 136.8×横 69.1 1903年（明治36）  
清沢満之の書状。晩年の清沢の信仰がうかがえる好個の資料。「私に対する」「無限の慈悲、無限の智慧、無限の能力」の実在を信じるのが「我信念」であるとした。如来を信ずることにおいて、虚心平気はこの世に生死することを得るのが清沢の精神主義である。
- 20 浩々洞同人寄書（師友相照） 1幅**  
絹本墨書 軸装 縦 43.6×横 48.0 明治時代  
浩々洞同人の寄書。浩々洞は1900（明治33）年、東京在住の清沢のもとに佐々木月樵、多田鼎、暁鳥敏が集まり、共同生活をしたのに始まる。ここから赤沼智善、山辺智学、曾我量重、金子大学など真宗教学や思想界に大きな影響を与えた人物を多く輩出した。浩々洞の関々の多くは学生として、あるいは教壇に立つて真宗大学に深く関わった。
- 21 精神界 2冊（全141冊のうち）**  
紙本活版 冊子 縦 26.0×横 18.8 1901～19（明治34～大正8）  
仏教の真意を平易な言葉で一般の人に伝えようと願った刊行された。刊行については俳句界の高浜虚子にその万事を頼ったという。表紙・カットは中村不折のデザイン、表題の三文字は中国の名筆家褚遂良の書から採字した。
- 22 精神講話 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 18.8×横 12.9 1902年（明治35）：初版  
清沢満之の講話集。展示は「仏による勇氣」は、1902（明治35）年正月26日の「精神講話」で語られたもの。精神講話とは、浩々洞で毎日曜日に清沢ら同人によって催されたもので、1901（明治34）年11月より1918（大正7）年まで続いた。本品は第10版で、1909（明治42）年刊。
- 23 仏教辞典 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 15.5×横 11.3 1909年（明治42）  
浩々洞で編集・刊行された仏教辞典。佐々木月樵が中心となって編集し、コンパクトながら総合的な仏教辞典となっている。見出し語は約2万、仏教用語のほか人名や地名も収録する。仏教用語の独特な読み方に留意し、呉音の読み方を丁寧に記している。
- 24 真宗聖典 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 15.0×横 11.2 1910年（明治43）：初版  
浩々洞で編集・刊行された浄土真宗の聖典集。1911（明治44）年親鸞六五〇回忌を機に編集された。第1版発行から、5ヵ月後には第8版に至った。大正年間に増補改訂され、1929（昭和4）年には第98版に及び、広く普及した。本品は第14版で1912（明治45）年刊。
- 25 親鸞聖人御伝鈔講話 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 22.4×横 15.2 1911年（明治44）  
浩々洞で刊行された『御伝鈔』に関する講話。親鸞六五〇回忌に際して刊行された。『御伝鈔』は本願寺第3代宗主覚如が著した『親鸞伝録』（詞書と絵からなる）から詞書のみを抜き出したもの。本品には当時議論されていた親鸞の真実に迫ろうとする気概がみられる。
- 26 清沢満之七回忌追悼会写真 1枚**  
モノクロ写真 縦 16.5×横 20.9 1909年（明治42）  
清沢満之七回忌追悼会に際しての記念写真。真宗大学が開かれた浅草本願寺にて3日間にわたり追悼会および講話の会が開かれた。背景に「知進守退碑」がみえる。
- 27 清沢先生の信仰 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 18.2×横 12.9 1909年（明治42）  
「私は此の如く如来を信ず（我信念）」に関する暁鳥敏の講話集。清沢満之七回忌の記念として、浩々洞から刊行された。清沢の東京大学時代の学友である沢柳政太郎の序を付す。本品は暁鳥の6回にわたる講話をまとめたもの。
- 28 清沢先生の教訓 1冊**  
紙本活版 冊子 縦 15.7×横 12.2 1915（大正4）  
浩々洞で編集・刊行された清沢満之の教訓書。清沢十三回忌の記念として刊行された。本品は浩々洞編『清沢満之全集』から、清沢の教訓となる100条をまとめたもの。
- 29 浩々洞三羽鳥墨蹟 3幅**  
絹本墨書 軸装 縦 119.0×横 42.5 1913年（大正2）  
若くして亡くなった暁鳥の妻房子のために、佐々木月樵・多田鼎・暁鳥敏の3人があらわした書。清沢のもとに集まった3人は「浩々洞の三羽鳥」と称された。



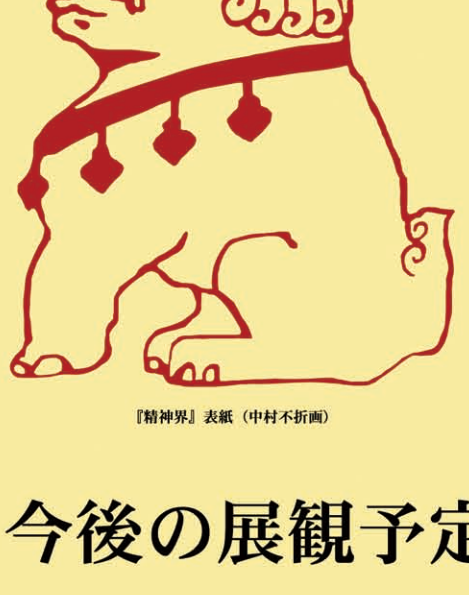
■9「知進守退」碑拓本



■15 清沢満之の肖像



■20 浩々洞同人寄書



『精神界』表紙（中村不折画）

## 今後の展観予定

- 夏季企画展  
「仏教の歴史とアジアの文化Ⅹ」  
□会期：2008年5月20日（火）～8月4日（月）
- 秋季企画展  
「仏教の歴史とアジアの文化Ⅹ  
—重要文化財『春記』と紙背聖教—（仮）」  
□会期：2008年9月9日（火）～9月27日（土）  
※併催 博物館学課程実習生展
- 冬季企画展  
「京都を学ぶ みやこの姿（仮）」  
□会期：（未定 12月より開催）

特別展 開館5周年記念  
聖徳太子伝の世界（仮）  
□会期：2008年10月10日（金）～11月29日（土）